

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 14 日現在

機関番号：32663

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652089

研究課題名(和文) 日系ディアスポラのコミュニティ、言語使用規範、アイデンティティ

研究課題名(英文) Japanese Diaspora: Their Community, Linguistic Norm and Identity

研究代表者

三宅 和子 (MIYAKE, Kazuko)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：60259083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000 円、(間接経費) 480,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人や物が様々な境界を越えて交差・融合する現代において、日本の国外で長期滞在・永住する日本語話者の実態を調査し、日本語と日本文化の保持と子供への継承、日本の規範や伝統へのこだわり、ことばとアイデンティティの関係を追究することを目的としている。調査の対象をイギリスに絞り、1960年代の高度成長期前後に渡英し高齢に達している国際結婚の日本人女性と近年形成されていったコミュニティの調査を出発点に、現代の子育て世代の国際結婚女性、日本人を夫にもつ日本人女性の調査とを相互に比較した。

研究成果の概要(英文)：This study investigates the experiences and present states of Japanese women married to British citizens, most of whom settled in the UK in the 1960s. It then analyzes the ways in which they have retained the Japanese language and cultural practices inside and outside of their home, and how those have been inherited by their children and contributed to the construction of their identities. By focusing on these women, and comparing their cases with those of modern-day women who have chosen to live in the UK, it aims to shed light on the roles played by language and culture and the process of communication between parent and child in recent waves of globalization and rapidly advancing digital technology.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：ディアスポラ 日系移民 アイデンティティ 言語の継承 ライフ・ヒストリー グローバル化 複言語 日系コミュニティ

## 1. 研究開始当初の背景

近年のグローバル化とデジタル・メディア技術の急速な進展に伴い、時空間の距離が短縮し、海外の様子や出来事がきわめて身近なものとなりつつある。駐在、留学/遊学、起業、退職など、さまざまな契機で海外に渡り、永住する意思をもった日本語話者も増加している。このような流動する社会の中で国や文化を越境し、比較的長期にわたり海外に在住する日本語話者を、筆者は、従来から研究されてきたハワイ、ブラジルなどの早期「日系移民」とは区別し、日系ディアスポラと名づけている。

日本における移民研究はこれまで、ハワイや南米などの早期移民の研究や移民言語の研究において盛んに行われてきた(例えば日本移民学会 1995-2014)。また、近年は東アジアなどの残留日本語に関する研究も行われている(朝日祥之 2005-2007, 真田 2006-2009 など)。

世界的な規模での移民研究は、歴史学、社会学、言語学的な方面で成果の蓄積をもたらしてきたが、近年はより多様な分野での研究が盛んになってきている。アパデュライ(1996;2004)の影響を俟つまでもなく、グローバル化とディアスポラの関係を論じた文化人類学と社会学的論考の刊行が日本でも続いている。カールズ&ミラー(1993;2011)は、社会学の立場から国際的な移民がグローバルに広がっていることを指摘した早期の研究である。

新しいタイプの在外日系人の研究も増加している。在米日本人家族の教育戦略、アイデンティティ、能力や感情に与える影響を研究した額賀(2013)、日本の若者を文化移民として捉えた藤田(2008)、国際化の中の日本人の「個」を問うた岩崎(2007)など、社会学、文化人類学、教育学、メディア研究などからのアプローチがある。言語研究では多言語社会研究(2008, 2010)のように、海外への移民および海外からの移民と言語の特集を組む学術雑誌も出てきている。日本語教育の分野では、川上郁雄が「移動する子どもたち」研究を牽引し、川上(2013)をはじめ日系児童の日本語教育に関する多くの成果をあげている。

欧州に定住した日本人に絞って考えると、その数は比較的少数であり、これまで「日系移民」として捉える目もほとんどなかった。しかし、高度経済成長期前後から日本人の在外居住者は増加の一途をたどっており、永住を決断する人々も年々増加している(外務省 2012)。その人口が最も集中している都市のひとつがイギリス、ロンドンである。日系ディアスポラはその社会背景も移住理由も様々ながら、移住先に自らの生きる道を見出し選択した人々である。その選択の動機、出自文化とホスト文化での自己表象、ことばとアイデンティティの関係の追究は、おのずとこれまでの「移民研究」とは異なりをみせる。

筆者は、日本語話者の対人把握とアイデンティティが言語行動にどのような影響を及ぼすかを研究してきた(三宅 2011)。

越境する日系ディアスポラを探求する足がかりとして、イギリス、ロンドンを中心に、拡散していた人々が次第に形成していった日系コミュニティに注目する。そして日本語の保持と子供への継承、日本文化の規範や伝統へのこだわりと自己のアイデンティティの関係を探ることにより、国際移動の渦中にある日本語と日本語話者の現在と未来を考える。

## 参考文献

- 朝日祥之(2005-2007)「サハリンに残存する日本語の地位に関する研究」科学研究費補助金若手研究(B)
- アパデュライ A.(2004)『さまよえる近代』門田健一訳 平凡社 原文は 1996 年
- カールズ S. & M.ミラー(2011)『国際移民の時代』関根政美・関根薫訳 名古屋大学出版会 原文は 1993 年
- 藤田結子(2008)『文化移民 越境する日本の若者とメディア』新曜社
- 外務省領事局政策課(2012)「平成 24 年度海外在留邦人数調査統計」  
<http://www.ny.us.emb-japan.go.jp/jp/h5/Report.pdf>
- 岩崎久美子(2007)『在外日本人のナショナルアイデンティティ』明石書店
- 川上郁雄編著(2013)『「移動する子ども」という記憶と力』くろしお出版
- 日本移民学会(1995-2014)移民研究年報 1 号-20 号
- 額賀美紗子(2013)『越境する日本人家族と教育』勁草書房、2013 年
- 真田信治(2006-2009)「東アジア残留日本語と日本語諸方言の相関にかんする研究」科学研究費補助金基盤研究(B)
- 多言語社会研究(2008)『ことばと社会』11 号 三元社
- 多言語社会研究(2010)『ことばと社会』12 号 三元社

## 2. 研究の目的

ディアスポラとは本来、ギリシア語で「まき散らされたもの」を意味し、故国や居住地を離れて暮らす国民や民族集団、コミュニティを、あるいは離散すること自体をさす。最も想起されやすいのはパレスチナを追われて離散して住むユダヤ人だが、それ以外の離散定住集団をさす場合もある。近年はその意味が拡大し、奴隷制によって海を渡ったアフリカ系アメリカ人、国外亡命者などをも含む。日本の社会学分野では、沖縄やアイヌ問題をディアスポラと関連づけたり、企業の海外進出と社員問題を論じたりするものに「ディアスポラ」が散見される。言語学領域では、移民言語や接触言語に関して、変容、保持、教

育など様々なアプローチがあるものの、新移民の実態に関する研究は管見ではない。しかし、グローバル化の中で様々な境界を越えて生きる異文化の人々の存在は今や看過できない現象であり、日本人も例外ではない。このような情勢を背景に、海外の新移民を「日系ディアスポラ」と名づけてアプローチする本研究は、社会言語学分野の嚆矢となり、今後の研究を促進する役割を担うことが期待される。本研究は従来の移民研究とは異なる視点から「日系ディアスポラ」にアプローチし、以下のことを 質的方法、量的方法を併用して明らかにすることを目的として研究を開始した。

- (1) イギリスに永住を決めた日本語話者のコミュニティ形成の過程と現状
- (2) 日本とイギリスの言語行動規範の異なりに関する個人の位置取りと言語選択
- (3) 各自の言語使用と自己アイデンティティの捉え方
- (4) 日本語と日本文化の保持と継承の意識と努力

人や物が様々な境界を越えて交差・融合する現代、日本以外を選択した日本語話者の実態を明らかにすることにより、これまでの日本人と日本語の捉え方やあり方を批判的に検証し、これからの日本・日本語・日本文化の向かうべき方向を見据える研究をめざす。

### 3. 研究の方法

方法論としては、イギリスの移民の歴史に関する文献調査を行い、実態調査ではエスノグラフィー、フィールドワークの手法を用いつつ、アンケート調査による大量データも扱い、質的研究と量的研究を融合させた形で対象に総合的に迫る計画であった。しかし調査途上において、研究対象者の事情によりアンケート調査の実施が難しくなった。したがって今回の研究期間内では質的研究を優先した調査とその結果が中心になっている。

調査の実施には、英国における日本人永住者の方々をはじめとする日本人会、在英日本大使館、日本人研究者の助力を仰ぎ、日本クラブ、The Japan Society の資料も参照した。また、インタビュー調査で得られた膨大な音声資料はすべて、院生アルバイトの手を借りて文字起こしを完成させている。

本研究は従来手が付けられてこなかった対象を新しい視点で研究する萌芽的な研究である。そのため、研究方法を探求することから始める必要があった。ここでは、研究期間内の活動を時系列に並べ、背景調査と実態調査の方法と進捗の過程を概説する。

#### 【平成 23 年度】

- (1) 個別聞き取り調査とアンケート作成のための予備調査

ロンドン、オックスフォードにおける 2 つの性格を異にする永住型日本人の相互扶助コミュニティ(「英国日本人会」と「オックスフォード住所録の会」)を対象として以下のことを行った

- 恒例行事への参加を通してコミュニティの性格を把握
- 主要メンバーへの聞き取り調査(「英国日本人会」の理事会と「オックスフォード住所録の会」の主催者)を通してコミュニティの成り立ちや特徴を把握した

(2) (1) の調査により、当面は「英国日本人会」に研究対象の焦点を絞ることとし、平成 24 年度のアンケート調査項目を選定して、執行計画をたてた

(3) 文献調査：移民に関する史的資料、社会言語学における移民言語・言語接触の資料などの文献を中心に関連文献を調査した

#### 【平成 24 年度】

(1) 「英国日本人会」設立者への聞き取り  
現会長佐野圭作氏へのインタビュー、創立者メンバー百子ウィリアムス氏へのインタビューを通して、当時の状況や設立の理念が明らかになった。しかし一方で、会員へのアンケート調査実施は、会の事情から見送らざるを得なくなった。この時点で量的調査は科研期間中は実行不能となった(継続交渉中)

(2) 恒例行事や月例会への参加を通してコミュニティの性格をより深く理解した

(3) 日本人墓地を訪れ、その歴史と再発見の経緯、現状などを調査した

(4) 戦後高度経済成長期を中心にイギリス人と国際結婚して永住した高齢の日本人女性 10 名のインタビュー調査を行った

#### 【平成 25 年度】

(1) 24 年度の高齢者を対象とした調査との比較を目的に、子育て世代の国際結婚の日本人女性 10 名のインタビュー調査を行った

(2) 24 年度後半に実施した高齢の国際結婚の日本人女性調査、25 年度前半に実施した子育て世代の国際結婚の日本人女性調査との比較を目的に、日本人と結婚して定住している日本人女性にインタビュー調査を行った

### 4. 研究成果

当初設定していた、量的研究と質的研究の双方からアプローチするという計画は、研究対象としていた英国日本人会の都合から、アンケート調査の保留を余儀なくされ、変更した。しかし、その後の軌道修正により、文献調査とインタビュー調査を精力的に行い、「挑戦

的萌芽研究」としての本研究の目的は達せられたと考えている。今後は、研究結果を踏まえて、発展的に設定した課題（学会発表にその計画の一部が盛り込まれている）にアプローチしていく。本研究の結果、明らかになったことを以下にまとめる。

#### (1)イギリス永住の日系人のコミュニティ形成の過程と現状

1983年の長州五傑以来、イギリス・ロンドンには、官吏や留学生をはじめ、ビジネスマン、職人、芸人など様々な職種の日本人が移住し、明治から昭和にかけて、財をなしてイギリス社会に溶け込んでいった人々を含む日系人社会が存在した。しかし第2次世界大戦時に永住者コミュニティは壊滅的な打撃を受けた。戦後、公的に日英関係が正常化した後もかつてのような姿はみられなかった。日本人の渡航が再度増加するのは、1960年代以降の高度成長期まで待たなければならない。現在のイギリスの在留者は6.5千人。その過半数以上がロンドン在住で世界第4位。永住者の8割以上が英国人との国際結婚女性である。

高度成長期以降ロンドンに長期在住する日本人は、国際結婚女性のみならず個々の生活圏の中で、集団を形作らずに生活する傾向があった。こうした人々の間で近年日本人コミュニティ形成の動きが出てきたのは、自身の永住の決断および長期在住者の老齢化という現実と直面したことが大きく関わっている。1996年に設立された英国日本人会の発足の主要な活動が、相互福利、勉強会、健康増進、日本人墓地の発掘と管理など、老齢化する定住日本人を相互扶助することにあることが、それを物語っている。

#### (2)英国における日本人、日本語の位置づけ

高齢に達した国際結婚女性の調査からは、1960-70年当時、日本との接触が極端に少ない言語環境の中で、英語と格闘しながら日本語の保持に努めた姿や、子どもに日本語を継承しようとする願いながら諦めざるをえなかった状況が浮き彫りにされる。一方、現代の子育て世代の国際結婚女性の生活はまったく異なっている。日本の政治経済的發展を経て、グローバル化とデジタル・メディアの発展の渦中に身を置く現代の日本人は、海外にいても日本の情報、食糧や物品などが本国と引けをとらないほど手に入れられる生活を送っている。また、複言語・複文化主義をとるEUの一員であるイギリスにおいて、日本人であることや日本語を保持することに大きな抵抗があるわけではない。むしろ奨励されるべきもの、後押しすべきものであると捉えられている。

#### (3)各自の言語使用と自己アイデンティティの捉え方

高齢の国際結婚女性は、日本食や日本的習

慣の一部を根強く継承させ、しばしば日本文化の規範や伝統へのこだわりが色濃い。英国籍の者も自らを「日本人」と位置づけ、日本的なものへの懐かしさや愛着、親戚や友人に対する親愛感を抱きつつ、日本、日本人への違和感や距離感も併せ持つ。このアンビバレントな感覚と自己アイデンティティの表出は、渡英から50年前後の時を重ねて形成されてきたものである。

一方子育て世代においても、日本語と日本文化の保持と継承の意識と努力が続けられている。圧倒的な情報量や物質的な豊かさを享受しているにもかかわらず、日本語と日本文化の継承は、ここでも大きな課題となっている。その要因として、子供たちにとって英国の日々の生活の質や意思疎通において、日本語や日本文化を継承することの意義が見出しがたい現状がある。日本の親戚などとのコミュニケーション以外、取り立てたニーズがないこと、世界全体がグローバル化の進行を深め、継承すべき「日本的」なものとは何かや、「日本人」であるということの意味が曖昧になっていることや、以前とは違っていることと、これは無関係ではない。

それでもなお、英国に永住して高齢に達した日本人女性と、子育ての渦中にある日本人女性には、日本語、日本文化を何とかして継承したいと願う思いが見出される。日本という出自を共有しながら人と人とが、そしてわが子と自分とが心を通わせることにおいて、ことばや文化が果たす役割は何かを、さらに追及していく必要がある。

研究結果を踏まえ、新たなメンバーを加えて規模を拡大した調査研究を計画・着手し始めた。日系ディアスポラをめぐる現代的問題の研究は、今後社会言語学のみならず、日本語・日本語教育研究へも幅を広げて展開する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

三宅和子「在英日系ディアスポラの言語生活 - 国際結婚した日本人女性とコミュニティの形成 - 」『文学論藻』第88号 査読無 2014年 pp.45-63

三宅和子「「人間学」としての日本語研究 - Yes、No と対応しない「はい」「いいえ」を手がかりに - 」『鈴木孝夫の世界』第四集 査読無 2012年 pp.147-162 富山房

〔学会発表〕(計 3件)

三宅和子・川上郁雄・岩崎典子「複言語使用者は日本語・日本をどのように捉え、どのように向き合っているのか」14th EAJIS International Conference(2014年 AJE シンポジウム・パネル) 査読有 2014年8月27-30日(8月30日発表決定) リュブリャーナ・スロベニア

三宅和子「在英日系ディアスポラのことば

とアイデンティティ - 国際結婚の場合」第 9  
回ひと・ことばフォーラム 査読無 2014 年  
3 月 24 日 東洋大学 - 武庫川女子大学(電子  
会議)

三宅和子「在英日本人女性のライフヒスト  
リーから見る日本語と日本社会」第 4 回ひ  
と・ことばフォーラム 査読無 2013 年 3 月  
30 日 東洋大学

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

三宅 和子 (MIYAKE, Kazuko)  
東洋大学・文学部・教授  
研究者番号：60259083